

**特 集**

「第15回日本臨床環境医学会総会特別講演」

(臨床環境15:75~75, 2006)

**総会会長からのひとこと**

—第15回日本臨床環境医学会総会(仙台)を終えて—

吉 野 博

第15回総会会長 東北大学大学院工学研究科

第15回総会は、杜の都仙台で平成18年7月7日、8日に良稜会館にて開催された。七夕の時期ではあるが、東北の七夕は旧盆のため8月であり、特に混雑は無いと予想されたので、この時期に設定した。私は建築学が専門なので、今回の大会テーマを「都市・建築工学と臨床環境医学のホライズン」とした。都市の大気汚染による健康障害は以前から問題となっており、また、今日ではシックハウス症候群にみられるように建材から発生する化学物質や結露が原因で発生するカビなどによって健康被害が生じており、都市・建築の環境が疾病の発生の大きな要因となってきている。疾病を予防し治療するためには、医学、化学、建築などの分野の学際的な取り組みによって原因を解明し、解決策を見出した上で、それを都市・建築の計画に結び付けていくことが必要である。このような視点から、建築の環境工学・設備工学の分野の研究者にも声をかけた結果、演題ではシックハウス関連を中心とした建築関係のものが従来よりも多く発表され、結果として演題数も前回は上回った。また、シンポジウムでは、「結露・カビと健康影響」と題して、5人のパネリストからアレルギー疾患の現状、建築と微生物の関係、カビの特性、真菌症の治療、カビ防止法について講演をいただき、参加者を交えて活発な討論が行われた。カビの問題は、結露問題とともに古くからの研究テーマであり、建築環境工学の分野でも40年ぐらい前から地道な研究が進められてきた。近年、シックハウスとの関連も指摘されるようになって改めて注目されてきており、今回のシンポジウムでも問題の重要性や課題の解決の難しさが浮き彫りにさ

れた。

特別講演では、日本建築学会会長である慶応義塾大学の村上周三教授をお招きし、「室内空気汚染による健康影響の定量的評価—DALYに基づく外部コスト、内部コストを考慮したFCA (full Cost Assessment)—」と題する講演をいただいた。DALYという損失寿命を表す指標を用いて空気汚染による健康被害量を算定し、最終的には総費用の面から、換気回数約0.5回が適切であることを理論的に導き出している。その手法の有用性や、やや難解ではあるが導かれた結論には大変に興味を注がれた。

総会の閉会後に、市民公開シンポジウム「シックハウス症候群についてどこまでわかったか？」を引き続いて開催した。ところが、このシンポジウムには新たに大勢の参加者が押しかけてきたために、開始を10分間遅らせるとともに、急遽、座席を増設した。シンポジウムは熱気のある雰囲気の中で開催され、厚生科学研究費で実施された石川班における6年間の研究成果の一端が6人のパネリストによって紹介された。パネリストの報告の後、石川哲北里大学名誉教授(本学会元理事長)の司会で活発に討論されたが、シックハウス問題において未解決の課題が多く残されていることが再認識された。

総会后、多くの方から会が成功であったとの言葉をいただきほっとした思いであった。しかし残念なことに会場の空気環境にやや問題があったため、折角、参加されてきたシックハウス患者の方が入室できなかったということもあり、当事者として大いに反省させられたところである。